
大罪宝具と異世界戦争

mosasa100

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大罪宝具と異世界戦争

【Nコード】

N6899Z

【作者名】

mosasa100

【あらすじ】

属性と呼ばれる加護が存在する異世界。その王国の闘技場の地下で行われている大会に参加しに来た少女ギリア。彼女の目的は優勝者に与えられる武器、大罪宝具を手に入れることで……

ばつちり厨二病なので、苦手な人はご注意ください。現実からの転生系（神様系ではないです）、TS（薄いですが）、百合要素、などが含まれる予定ですので注意してください。

序章 地下闘技場

様々な種族や民族が存在するこの世界の中の一つに、緑豊かな大地と、豊富な資源に恵まれた王国『イワニガーナ』という国があった。

その国には、腕利きたちが集まり競い合う、王立の闘技場が存在した。そこで優勝した者には一生遊んで暮らせるほどの賞金と栄光が手に入るとまで言われているほどの大規模な闘技場だ。年間数えきれぬほどの者がそこに挑むが、勝者は一年に一人のみ。それでも挑戦者が絶えないのは、やはり魅力があるからなのだろう。

円形の闘技場で、観客席は高い足場に来ており、一番見やすい高さには主賓席なども存在する。一番低く、大地と同じ高さの位置が戦うフィールドだ。つまり選手は、360度周りから見下ろされる形となっている。

その日は、ある有名な騎士がその闘技場に参戦するという話で持ちきりになっており、どこもかしこもざわついてばかりだった。

そんな闘技場の地下。まるで天地が逆さになったように、真逆の闘技場がもう一つ存在していた。地上の闘技場を騎士道を重んじる正式試合だと考えれば、こちらは死合い。ルール無用の殺し合いだ。そんなアングラな闘技場の控室で一人の少女が下品な表情で笑っていた。

戦うための衣装にしては露出の多い、布地だけで作られたものを着た17・8歳程度の少女は、その女性として発達した体形や美しく長い銀髪に似合わぬような表情で頭を掻き、上を見た。

「なんだよ。随分うるせえな」

その言葉に、控室に居た他の参加者のうちの一人、肉だるまのような大男が言った。

「知らねえのかい嬢ちゃん、今日は上に騎士様が来てるんだぜ？」

「騎士様ア？　なんでったってそんなお偉いさんがわざわざ来たら

「っしやるんだよ」

少女の言葉に、大男は首を振った。

「悪い、そこまでは知らねえわ」

「なんだよ、じゃあわざわざ話しかけてくんじゃねえよ。それとも何か？　こんな美しいオレと何とかお話をしようとか共通の話題でも探してたのかい？」

そう少女が言うと、大男は心外だと言うような顔で大きく両手を振った。周りの他の参加者たちも抜け駆けしやがってというように目で大男を睨んでいる。

「つつか、なんで嬢ちゃんみたいなのがこんなところにいるんだよ。しかもそんな服装でよお」

「ここは娼館の客取りする場所じゃねえぞ」

大男の言葉に、他の者が同調するように声を上げる。

「ここは何でもアリの方だけ？　地上と間違えてるんじゃないの？」

「負けて犯されても文句言えね〜よ？　ヒヒッ」

じろり、と全身を嘗め回すような視線を感じ、少女はより一層下品に笑う。

「くひひっ！　オレを犯そうってか？　良いね、この視線、ああ、堪んないわあ。良いぜ？　もちろん勝てたらな」

少女の言葉にその場にいた全員がごくりと生唾を飲む。それほどまでに性的な魅力を感じる体形をしているのだ。

「その言葉、後悔するなよ？」

「しねえよ」

その時、地上の方で試合を告げる鐘が鳴った。地上と地下の試合開始時間は完全に同時刻と決まっているので、選手たちも立ち上がる。

「さつて、どんな組み合わせになるかなあ」

少女が体を伸ばして、一度大きく深呼吸する。その動作をまた周りの男たちはじっと見た。その視線を感じながら、少女は控室から出た。

地上側の地面に当たる部分が天井となっており、そこからドーム状に観客席があり、最下層の、地上では空に当たった部分が戦闘のフィールドとなっている。

司会実況役の女性の声が響く。

『さあようこそ！ 史上最も過酷な闘技場へ！ ここに集まりたるはこの国の真の先鋭のみ！ 上のやつらとはわけが違う！ 我らこそ真の強者なり！』

観客席の下層側、一般客用の席から歓声が沸く。

『それでは参りましょう！ まずは注目の第一戦！ いきなり新人です！ この美貌！ この肉体！ この露出！ いったい何を武器に戦うのか！ ギリア選手です！』

どこかで聞いたことのある名前ですね、と呟いた実況の声を背に、少女、ギリアはフィールドに上がる。

観客席の男性陣から歓声が上がった。

布をまとっただけのように見える服装も、彼女が着ることで立派なファッションの様に見える。

反対側のゲートの向こうから対戦相手が姿を現す。

『対するはベテラン肉だるま！ その肉の下に埋もれた者は数知れぬ！ 超重量型パワープレイヤー！ 本名不詳！ 大男！』

先ほどの大男が現れる。大男の方も鎧などは着ていない。観客席の方からはブーイングと歓声が半々で聞こえる。ギリアはじつと前を見た。

『ルールは簡単！ 先に相手を殺すか戦闘不能にした方の勝ち！ 何をしてもOKです！ では参りましょう！ 試合つ開始！』

「試合相手、あんただったのか」

ギリアは大男を見た。鎧の類は着ていない。肉体に自信があるのだろうか。

「降参するか？ 今なら壊さずに帰してやらないことも無い」

「うんにゃ、必要ないね、オレ強いからな」

そう言うと、ギリアは一瞬で大男の懐まで飛び込み、渾身の右ストリートを打ち込んだ。

『ギリア選手速い！ 目にもとまらぬ速さで殴りに行ったーッ！
しかし、大男効いちゃいない！』

「チツ！」

ギリアは大きく後ろに跳び距離を取る。

妙な感触だなオイ。ギリアは手を何度か握り、感触を確かめる。

「ふむ、確かに速いな。しかし軽い軽い。大罪人『暴食』の御方の配下である俺の敵じゃあねえな。嬢ちゃん」

『そうッ！ この大男！ 世界に七人しかいない大罪人の一人『暴食』の配下なのです！ つまりこの男も暴食の加護を受けているという事！ つまり属性は『暴食』！！ 喰えば喰う程強くなる！
こいつの脂肪は底なしかー！ーッ！！！！』

実況の声を聴き、ギリアはなるほどね、と頷いた。

「それにしてもノリノリな姉ちゃんだ。良いテンションだな」

『お褒めに頂き光栄です！ しかしギリア選手！ このままなすべもなくヤラしてしまうのか！！』

「聞こえてんのかよ」

大男は、そうだろう、と頷いた。

「聞こえているんだろうな、毎回、耳が良いもんだ。じゃあ行くぜ嬢ちゃん！」

ぼよん、と弾むように飛び跳ねた大男は、そのまま凄まじい勢いでギリアに向かって飛び込んだ。

「スーパーボールか何かかよッ！」

横に転がり避ける。すると元居た位置に大男が激突し、地面を削り転がっていく。そのまま地面を凹ませながら二三度跳ね、再び大男はギリアの方へと飛び込んだ。

「めんどいな！」

ギリアはタイミングよく回し蹴りで迎え撃つ。蹴りのぶつかる瞬

間、足が大男の巨体の中へと沈んでいった。

「クソツたれ！」

「そのまま沈みな嬢ちゃん！ 肉の下でぐちよぐちよにしてやるよ！」

『大男鬼畜です！ 我々には見せないつもりだーッ！ 見せるよ肉だるまー！』

ギリアは、片足の裏を地面に固定し、無理やり脂肪に沈んだ足を引き出し、そのまま再びその脂肪に蹴りを打ち込んだ。

「今のは ゴボツー！！」

大男はその不可解な動きに疑問を覚えた瞬間。全身を衝撃が駆け巡り、吹き飛んだ。

大男は混乱していた。あそこから、脱出などできるのか！？ 片足で、無理やり引き抜くなど、どういう筋肉だ！ しかもあの攻撃は、何だ！？

『吹っ飛んだーッ！？ ギリア選手！ 肉だるまの脂肪から脱出！ あの脂肪を蹴り飛ばした！！！！』

ギリアが両足を地面につけ、膝を叩いていると、大男が叫ぶように言った。

「なんだ今のは！」

その言葉にギリアは胸をつき出すようなポーズを取った。

「機族キキゾクの族長！ 『色欲』ギリアたアオレの事よ！ 決まったな！ キヒツ！」

「『色欲』だとお！」

『どおりで！ 聞いたことある名前でした！ 『色欲』ギリア！ 体を自由自在に謎の物質に変える事が出来るという謎の部族！ 機族の出だという！』

「ヒュ〜、盛り上げるねえお姉さん」

ま、謎の物質ってわけじゃないんだけどね。ギリアは笑みを深くする。

「自分の正体を明かす！ この瞬間が最高に気持ちいい！！ 酔っ

「ちやうわあ！ うふふ」

「てめえみてえな小娘が大罪人『色欲』だと！！」

唾を飛ばしながら大男が叫ぶ。

「オレみてえな若い美女だから『色欲』なんだよ！ 熟女趣味は隅
つこで泣いてな！ じゃあ行くぜ！」

そう言つて高く掲げたギリアの右腕の肘から先が、光の中でぐに
よりと形を変える。光のおさまった場所には、全長2メートルほど
の、円柱の先に大き目の半球を付けた様な、巨大な金属の塊になっ
ていた。それを左手で支えながら、前方、大男の方へとつき出す。

「淫凸いんとう！」

『妙にエロい形だーッ！！ あんなデカいの見たことない！』

「やっぱ肉の中にぶち込むんならこの形じゃなきゃよオ！」

それに対するように大男が吠える。

「そんなもの俺にぶち込む気か！！」

「モチ！ 足腰立たなくなるまでぶち込んでやるよ！！」

「ならば！ そのまま押しつぶすだけだ！！」

再び脂肪の塊となって突進してくる。先ほどよりも勢いがある突
進だ。対するギリアは、両足の裏から地面に向かっていくつももの金
属の針を生やし、打ち込むことによつて、自分の体をその場所に固
定する。そのまま体を捻り、勢いをつける。関節などは金属に変え
て補強する。

「潰れる小娘ッ！！」

捻つた体をもとに戻す勢いで、一気に相手の体に打ち込む。普通
の肉体ならば悲鳴を上げるが、ギリアの体は今金属で補強されてい
るので、限界を無視した勢いで放てる。

そして衝突。

衝撃音と共に、ずぶり、と脂肪に沈んでいく淫凸を見て、大男は
勝利を確信した。

このまま、潰れる！

そんな様子を見て、ギリアはキヒツと笑った。

「こいつあな！ 1秒間に69回、先頭部分が前後にピストン運動する作りでな、ほら来た来たキター！」

その言葉と共に、舌を出したギリアの眼前で、大男は痙攣するかのように振動を始めた。

「逝っちまいな！ 穿てよ淫凸ッ！！」

ピストン運動により、半球と円柱の間のそりかえしの部分に挟られた脂肪が、血と共に周囲にまき散らされる。

「ガアアアアアアア！！！」

ドポリ、という音と共に、脂肪の塊を淫凸が貫いた。そのまま淫凸は光の中に消えていき、大男は地面に倒れた。

『私、大男選手の悲鳴を初めて聞きました。彼が血を流している所を見るのも初めてです。圧倒的だーッ！ ギリア選手、圧倒的実力差で、ベテラン相手に初戦を勝ち抜いた！！』

そんな実況を聞きながら、ギリアは血の付いた右腕を振り払った。血を少しなめてみる。

「不味い。食うもんが悪いな。それじゃただのデブだ」

『勝者！ ギリア選手！！』

「ま、当然ってことよ」

照明を浴びながらギリアは考える。

オレがこの世界に来て、女性になって17年ってとこだったか。ついにここまで来たな。

先代にして初代の『色欲』が残した大罪人専用宝具『罪具』、『色欲のアスモデウス』。それを求めて旅をして、たどり着いたのがこの地下闘技場だった。ここに罪具の一つがあるという情報を受けたのだ。

「うふふ、それさえあればもっと快樂が、ああ、本当に楽しみね、楽しみだなあ！」

始まりの話

ギリア・レプタンサは一族の人間から見ても妙な子供だった。

イワニガーナ王国の外れの森の中、小さな村に隠れるように住む一族、機族。その中でも、飛びぬけて奇妙な子が、ギリアだった。

小さなころから、異常なほどに美しかったギリアは、しかし生まれつき男言葉で話すのだ。自分のことを男かと認識しているのかと思うと、それに反して女性を強調する格好をする。小さなころから不思議な色気に満ちた少女だった。

親が早くに死んでしまい、孤児となったギリアは、その性格も相まってか村では浮いた存在だった。

いくら綺麗でも、いや、綺麗だったからか、その不釣り合いさでいじめられたりもした。それを全員倒したら、今度はそいつらの親がやってきた。なんてことはない、日々戦って生きてきた。

この世界の住人には、生まれながら、或いは生きる過程にて、それぞれ属性というものが与えられている。

例えば、『純潔』『希望』『暴食』などが挙げられる。さらにそれらを極めた人間には、それぞれ呼び名が付くのだ。属性『勇氣』の到着点『勇者』や、『慈愛』の到着点『女神』などである。他にも特殊なものとしては、『嫉妬』『暴食』『憤怒』『怠惰』『色欲』『傲慢』『強欲』の7属性、それぞれ極めた者を大罪人と呼ぶなどである。

ギリアの属性が『色欲』であると判明した時、周りの大人たちは一様に納得した。ならばこの色気も領ける、いっそ娼館にでも売ってしまおうか、と。

決まってからは早かった。男たちは、処女のまま売るべきか、一度楽しむべきかという話をしながらギリアの元へと向かうのだった。

自分の属性が『色欲』だと知った時、ギリアは啞然とした。

「くひひ、おい、オレが色欲ってことは、つまりあれか？ オレが男に抱かれることを願ってるとか、そういう事か？」

露出させた臍を撫でながらギリアは考えた。そのまま身をよじる。この露出は敢えての事なのだ。こうでもしなければ、こうでもして自分に見せつけなければ、体と心の齟齬から気が狂ってしまいそうだったから、苦肉の策だったのだ。

「それが今度はこれかよお。良いね神様、いい試練っぷりだ。生きてる実感が湧くねえ。ま、神様なんか見たことないけど」

いるのだろう、自分がこんなところで生まれ変わっているのだ。きつといるのだろう。そう考えた方が打ち滅ぼす目標が出来て良い。「良い、ああ、いい……なるほどね、こりゃまあ、気持ち良い感覚ね、うふふ」

障害を乗り越えた時を想像すると、言いようもない興奮と快樂が押し寄せる。

この感覚が快樂なら、はまる人が多いのも頷ける。捕まえようとしてきた大人の腕を、刃に変えた腕で切り落とす。

大人が何か叫んで、喚いていた。

「ああ、みつともないわ、みつともねえなオイ」

何か、また叫ぶ。

構わない、この村には何も未練はない。ならば彼らはオレの糧となるべきだ。そうギリアは笑った。舌をべろりと出して、それを男たちに見せてみせた。

「ああ……」

そのまま溜息をついて、自分の体を抱くように腕を交差させる。背中から、大量の銃口を発生させる。

トリガーは心の中にある。念じれば一斉掃射だ。打ち出される弾はギリアの精力の塊。

「貫け、うふ」

全身から弾が発射される。

周りに立っていた人間、大人も子供も、男も女も関係なく、村中が貫かれていく。防御の為に体を金属に変えた者もいたが、それすらも貫いて弾丸は行く。

やがて全てを打ち終えて、静かになった村の中心でギリアは空を見上げた。

妙なものである。こんなに簡単に殺せてしまうのに、今までやられる側に甘んじていたというのが、実に妙だ。

血の池に一人立ち、ギリアは笑う。そのまま、血が跳ねるのも気にせず歩き出した。

「ああ、なんでもっと早くやらなかったんだろっ、オレもまだまだ馬鹿だなあ」

まだ生き残りがいたらしい、民家から女性が飛び出してきた。確か、最初に腕を切り落とした男の妻だっただろうか、とギリアは考えた。

この淫売が、とか、育ててやった恩を、とか、あんたが夫を誘惑した、だの言っている女性に向けて、ギリアは右腕をつき出した。

「淫凸」

そしてあらわれる、2メートルの金属の塊。それを構えながらギリアは言った。

「あなたに魅力が無いのが原因じゃない、なんつってな。くらいな！壊れるまで愛してやるよ！」

そのまま、下腹部目指して一気にぶち込んだ。淫凸は、女性を貫いて、赤黒く光っている。

淫凸を解除して、右手に付いていた血を舐めてみた。ちょっとしたかつこつけのつもりだった。

「あん、おいし……おいおいまじかよ」

自分の反応に呆れたギリアは、頭を掻きむしった後、村全体を見回す。

「さて、どうすっかな」

もうここに居る必要もないだろう。ならば、ただ自分の欲望を満たすように生きてみようか、ただ強く、淫らに、美しく。それはとても、

「素晴らしいかもしれないわ」

もっと多くの危機がオレを襲うのだ、そしてそれを圧倒的パワーで虐げる。素晴らしい人生だ。

前世には比べものにならないほどに、きっと素晴らしいのだろう。「ならまずは大罪人を目指すか、とりあえず、淫らに殺りまくればいいのかあ？」

村から一步出る。どちらに行こうか、わからないことだらけだ。そうして、ギリアの当てのない旅が始まったのだった。

それが5年前だっただろうか、とギリアは考えた。

今思い出すはずいぶん恥ずかしい言動だった気がする。

ともあれ、5年で大罪人仲間入りを果たし、罪具のありかを見つけるところまで来たのだ。随分順調なのだろう。

歓声が聞こえた。地上の方からだろう。実況の声も聞こえる。

『さすが、圧勝だ！ 寄せ付けない！ 『忠義』の騎士ベロニカ・ルリトラノ！！ 名誉の名は美貌と共にそこに居た！！』

どうやら噂の騎士様らしい。ギリアは地上を見上げた。

罪具が現れるのは、年に一度、地上と地下両方の王者の記念試合の時のみと決まっているらしい。

「ああ、早く見てみたい……」

なれば、勝ち残らなければ。相手は後何人だろうか。

ギリアは自室として宛がわれた、闘技場地下の一室の天井を、じっと見つめ続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6899z/>

大罪宝具と異世界戦争

2011年12月23日02時45分発行